

2017.06 vol. 1

# Gno -info

Gnoble information paper



P.02-03

## 1 テストの役割が変わる

大学入試センター試験を19年度で廃止。  
大学入学希望者学力評価テスト、  
高等学校基礎学力テストの導入で  
論理的思考力を問う新テストへ。

## 2 中学入試が変わる

教育改革を見据え、小中でも教育内容を見直し。  
中学入試で問われる、思考力と表現力。  
英語入試も導入。

## 3 英語が変わる

小学生から英語教育のレベルの底上げを。  
単なる「教科」の域を超える、  
英語をより実用的な言語へ。

## 4 国語が変わる

国語が教育改革の土台を築く学問に。  
歴史や道徳などとの教科横断型の  
授業スタイル導入へ。

## 5 大学が変わる

各大学の「入学者受入れの方針」  
「教育課程編成・実施方針」  
「卒業認定・学位授与方針」の策定と公開が義務化。

P.04

### News Hotline

#### 見えてきた、大学入学共通テストの全貌

- 1 2017年11月。大学入学共通テストの『プレテスト実施』が決定。
- 2 英語の考查基準と方法が明らかに。
- 3 国語では80~120字の記述式問題が。

東大理Ⅲ・2018年度より  
面接試験を11年ぶりに実施。

Topic

# 解明！ 「高大接続改革」

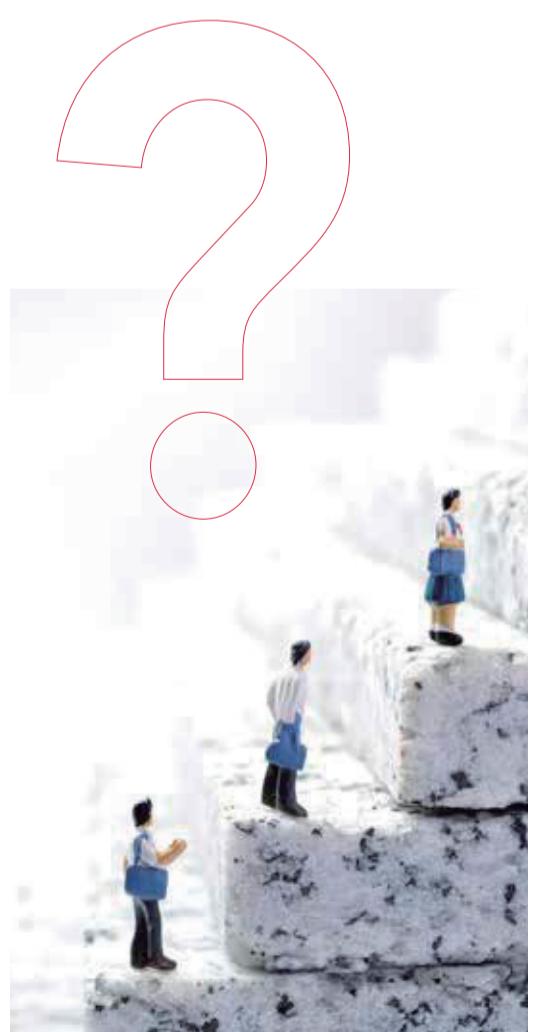
「センター試験の廃止」や「テストは論述式の設問へ」という話題がクローズアップされる『高大接続改革』。皆さんも少なからず耳にされているのではないでしょうか。しかしこれは、いまの大学受験生にとっては、「直接的には関係のないこと」とも思えますし、数年後に対象となる世代の方々にとっても、「まだ先のこと」と考える傾向にあり、現実味が薄い情報と捉えられがちです。しかし、その目的や改革の流れを確認してみると、既に教育界全体で起り始めていた変化や進化の要因が浮き彫りになってきました。

「高大接続改革」は、  
新時代に適応するための教育改革の要

**か** つての日本は「進学校→良い大学  
→良い会社→一生安泰」のレール  
が堅牢で、多くの人が何の疑問や  
不安もなくそのルートを目指していました。  
しかしこれからの社会は、不安定で正解がなく、いかに変化の速い時代に適応して新しい  
価値を創出していくかが問われます。

そのような時代に求められる能力は実に  
様々です。「偏差値が高い=受験勉強ができる  
=決められた答えを導き出す」だけでは測  
れない、多角的なモノの見方や気づく力、思  
考力、主体性などが求められるようになって  
いきます。そして、そのような力を引き出し伸  
ばすための、新たな時代を見据えた教育改  
革の要が「高大接続改革」なのです。

「高大接続改革」とはその名の通り、高校  
と大学を接続するシステムを改革することです。  
具体的には、「センター試験の廃止」が目  
に留まりやすいテーマとして注目されていま  
すが、重要なことはセンター試験の代わりに  
「どのような目的で、どのような考查方法が  
導入されるのか」という点です。また、考查方  
法の変化にともない、高校はもちろん小・中  
学校の教育においても大きな改革が予定さ  
れています。この中身を整理すると、抑える  
べき5つの「変わる」ポイントが見えてきます。  
さらにその「変わる」を読み解くと、未来の受  
験生はもちろん、今年度の受験生にとっても  
他人事ではないことがわかつてきました。



# 1 テストの役割が変わる

## センター試験を廃止し、「大学入学希望者学力評価テスト」を導入

「高大接続改革」は、新たな時代を見据えた教育改革を進めるにあたり、これから的小・中教育から高校までを通じた教育本来の在り方を見直すことを目的としており、文部科学省は子供たちが育むべき力として「豊かな人間性」「健康・体力」「確かな学力」を総合した力、すなわち『生きる力』を挙げています。

とりわけ「学力」については長い間、「ゆとり教育」と「詰め込み教育」との間で対立的な議論がなされてきましたが、「ゆとり」か「詰め込み」か、といった対立的なものではなく、①基礎的・基本的な知識・技能、②それらを活用する思考力・判断力・表現力、③主体的に学習に取り組む態度、から構成される『学力の3要素=確かな学力』を指すとしています。

この方針変更に伴い大学入試制度も見直され、その一環のトピックとして注目されているのが、20年度の「大学入試センター試験」廃止とともに「大学入学希望者学力評価テスト（仮称。以下「学力評価テスト」と表記）」の導入です。

## 思考力・判断力・表現力を問う記述式問題が登場

「学力評価テスト」は、現行の学習指導要領で学んだ生徒が受験する20年度から試行されます。変更のポイントは、マークシート式に加え、国語と数学に300字程度の記述式問題を導入する点です。数学では数式を書かせる問題も設けるなど、解答を導くための発想力なども評価されます。

また、英語については、現行のセンター試験では「読む」「聞く」の2技能を

マークシート式とリスニングで測られていますが、社会のグローバル化にともない“英語によるコミュニケーション能力の育成”が教育課題となっています。新テストでは「話す」「書く」を含む4技能を評価するように変更されます。

当面は、入試センターと民間試験の併用で行われる見込みで、受験生は12月までに「話す」「書く」の2技能について民間試験を受け、その後、12月か1月に実施される新テストで、従来と同様にマークシート式で「読む」「聞く」の試験が行われます。将来的に民間試験に一本化されれば、受験生は12月までに4技能試験を受け、新テストでの英語試験はなくなる見込みです。

また、次期学習指導要領で学んだ生徒が受験する24年度には、試行期間のデータを活かしてテスト内容や採点方式を改善すると共に、記述問題の更なる長文化や、パソコンやタブレット端末を用いて解答するCBT(Computer Based Testing)の導入も検討されています。

新テストの実施自体がまだ先であり、

19年度中に予定されている「実施大綱」の策定・公表までに出題・採点方式などの検討が重ねられ、議論次第でこれから更なる変更の可能性もありそうです。

## 19年度からは「高等学校基礎学力テスト」を導入

「学力評価テスト」より1年早く、19年度からは、生徒の基礎学力を確認するための「高等学校基礎学力テスト」（仮称。以下「基礎学力テスト」と表記）がスタートします。当初は国語・数学・英語の3教科で、高校2年と3年時のそれぞれ年2回実施されます。学力評価テストと同様に英語の「話す・書く」能力や記述力などを試され、結果は点数ではなく10段階以上に分けて示される予定です。

「基礎学力テスト」は22年度までの4年間は試行期間とされ、結果は高校教育改善のために活かされます。大学入試に用いられる「学力評価テスト」と違い、教師や生徒が個々の苦手分野を知り、残りの高校生活に活かしてもらうことが目的

です。そのため問題も基礎的な知識、技能を問う問題が中心になります。

23年度以降は、次期学習指導要領の実施に合わせ、地理歴史、公民、理科などを追加し、実施方法や回数などが変更される予定です。

当初は大学が「基礎学力テスト」の成績を合否の判断基準に使うことも想定していましたが、そうなると高校2年から試験対策の勉強が過熱し、本来の部活動や高校生活がおろそかになるとの懸念もあり、文科省は当面の間、入試代わりに使わないよう各大学に働きかけています。

## 入試改革により、学習方針に年度ごとの微妙なズレも!?

20年度に導入予定の「学力評価テスト」が実施されると、学年ごとに学習内容と受験スタイルのくいちがいが起こり得ることが懸念されています。

### 【17年度の高1】

「センター試験」最後の世代。浪人すると、翌年度は新しい学力評価テスト。

### 【17年度の中3以降】

センター試験の過去問が参考にならない。

### 【17年度の中3～小6】

入試制度は変わらが、授業は旧来型で混乱。

※参考:「高大接続改革の進捗状況について」2016年8月31日、文部科学省

## センター試験と大学入学希望者学力評価テスト（仮称）の比較

実施方法	2019年度まで	2020年度から	2024年度から
出題・解答形式	マークシート式	マークシート式と短文記述式（国語と数学、80～120字程度）	コンピュータでの出題・解答・長文記述（300字程度まで）
採点結果の使用方法	1点刻みの素点を各大学に提供	マークシート式は従来通り、記述式は段階別評価。分野ごと、問い合わせの回答も大学に提供	
実施時期	1月の2日間	記述式は前倒して別日程とする	

### 出題の改善点と傾向

#### マークシート式

複数のテキストや資料を読み解き、情報を組み合わせて思考・判断する。他教科や科目、社会との関わりを意識した内容を取り入れる。

英語 「読む」「聞く」に加えて、「書く」「話す」も評価する。「話す」の評価は録音機器の使用を検討。

国語 情報を端的に解釈、自分の考えをまとめて書くなど、思考力や判断力を判定する。

数学・理科 事象の中から大事な情報を見つけて出し、構造化し、問題を解決する力など、思考力、判断力、表現力を判定する。

地歴・公民 単なる暗記による知識量を判定材料としないよう出題を工夫する。

# 2 中学入試が変わる

## 中学入試にも、思考力・判断力・表現力を問う動き

「高大接続改革」を見据え、中高一貫校の中には次期指導要領を意識して、思考力や英語力などの向上を目指した独自の教育方針を打ち出し始めている学校があります。さらに、その方針変更を入試における出題や採点のスタイルにも反映させ、「思考力入試」や「適性検査」を受験で実施する学校が増え続けています。

例えば、都内の中高一貫女子校には、かつては20問ほどあった国語の問題を2間に絞り、筆者の意図を自分の言葉に置き換えたり、身近な体験を用いて自身の意見を論じるという、思考力・表現力を問う問題設定を変えた学校もあります。

また、思考力を見る問題として、学科

横断型の質問を設ける学校や、レゴブロックを用いて自身の思考を表現してから意図などを記述させるテストなど、各校が工夫を凝らしています。

## 英語が受験科目の1つとして注目

首都圏模試センターによると、17年度の首都圏中学入試における「英語（選択）入試」の実施校数は、16年度の64校から31校増の95校。そのうち、94校が私立中学でした。また、この1～2年の間に新設された「英語（選択）入試」では、面接やグループワークで交わす英会話を通して、受験生のリスニングとスピーキングの力（資質）を評価する私立中学校が現れています。

英検などで一定以上の級を取得して

いる場合「特待生制度」を適用する学校もあり、「英語（選択）入試」は実施していくとも資格取得によって得点が加算されるというケースもあり、英語に特化した受験勉強が新たなスタイルとして定着しそうです。

## 人気校のトレンドも右往左往!?

教育方針や入試スタイルの変更で教育改革の時流にいち早く乗ろうとする学校が増えるにしたがい、受験生や保護者の注目が更に高まることが想定されます。すると、いち早く新しい「学力評価テスト」に対応した進学校が注目を集め、偏差値やこれまでの人気トレンドに縛られず、人気が突然的に集中するようなケースも考えられます。



### 平上先生の見解・アドバイス

大学入試が大きく変われば、中学入試で求められる力も当然変化しますが、何十万人も受験するために変革に時間がかかる大学入試よりも、むしろ相対的に規模の小さい中学入試の方が先んじて記述式や思考力・表現力を試す問題を積極的に取り入れている面があると思います。その最たる例が都立など公立の中高一貫校の入試で実施されている「適性検査」です。すべての私立中入試が「適性検査」のようになるとは思いませんが、入試改革の一つの方向性を示していると思います。

(中学受験グノーブル:広報担当)

一方で、授業料の高さなどから敬遠された時期があった大学付属校が、大学入試回避を目的として人気が再燃するのではないか、とも言われています。

このように、「高大接続改革」の方針変更は、大学受験を控える受験生だけではなく、中学入試も含めた教育全体に影響を及ぼしそうです。

Can you speak English?



## 3 英語が変わる

### 英語教育のスタートが前倒し

今まで「小学5年生から必修」であった英語が、20年度までに「小学3年生から必修化」「小学5年生から教科化」と変更されることが決定しました。

現在、小学5~6年生が習っている英語は、「外国語活動」として中学で英語を本格的に学び始める前に、歌やゲームを通して英語に慣れ親しんでもらうことを目的と

しています。中学から突然始める英語にとまどい「英語嫌い」になってしまう生徒を減らすために、11年度から実施されており、年間35コマが設定されています。

20年度からの変更点は、現在小学5~6年生で行っている「外国語活動」を小学3~4年生に前倒しするというものです。小学5~6年生には英語の教科書を使って単語や文法など文章の決まりを習います。正式な教科になるため、他の科目と

同様に学習評価が行われるほか、年間の授業数も70コマに増えます。

### 話す力の習得で 英語力のレベルアップを

小学校での英語の教科化にともない、中学校の英語も21年度から新しい内容になることを文科省が発表しています。

その大きなポイントは、「読む」「聞く」といった英語能力に加え、自分自身の考えを英語で伝えられるようになる「話す」能力の向上が目標とされています。既に一部の学校で取り入れられている海外の

学生とのスカイプを用いた英会話の授業のような、より実践的な授業の導入が進みそうです。

また、高校卒業までに学ぶ単語数もこれまでの3,000語から、4,000~5,000語に大きく引き上げされました。教育内容の進化に合わせ、19年度から開始される「基礎学力テスト」のレベルについても、その都度改善を行うこととされています。この流れから今後は、個別の大学入試においても、各校の英語のテストの内容がより難しくなることが想定されます。

### 受験対策ではなく 生き抜く手段としての英語を

これらの英語教育に関する改革は、「将来どのような職業に就くとしても求められる、外国語で多様な人々とコミュニケーションを図ることができる基礎的な力」を育むという目標が根底にあります。英語をカリキュラムの1つで終わらせず、実用的な言語として当たり前に身につけるものにしようという時流を明確に表す改革であり、全体のレベルアップに合わせ、将来的には更なる目標の上方修正を行うことも考えられます。学ぶ側も、英語を一つの教科として捉えるのではなく、これから時代を“生き抜く手段”として意識そのものを変えることが求められそうです。

### 2020年度から小学校の英語はこう変わる

#### 現在の小学校では…

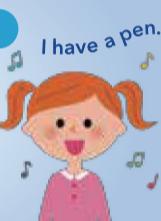
#### 2020年度から

##### 外国語活動としての英語



コミュニケーションの楽しさを知る

##### 4年生



発音やリズムに親しむ

##### 教科としての英語

##### 5年生



基本的な文法を学ぶ

##### 6年生



伝えたいことを簡単な語句で表す

## 4 国語が変わる

### 論理的思考力を養う軸として 国語教育に注力

17年2月に発表された次期学習指導要領によると、小学校では日本語の言語文化に関する指導や情報の扱い方に関する指導も国語の授業の中で行うと方針が定められました。言葉の乱れや発信の仕方の難しさといった現代社会における問題を国語の授業の中に取り入れ、考え方させることによって、単なる言語の習得だけではなく、社会や道徳も兼ねながら思考力を養おうという狙いです。

また、中学校の国語では、新聞を読んで調べた内容を報告し合ったり、新聞記事を比較して主張の違いについて討論したりするグループワークを国語の授業に取り入れることも勧められています。新聞でまとまった量の文章を読むことに慣れて読み解力をつけると共に、主張の違いや自らの意見を発信することで、思考力や自主性を育むことを目指します。成長段階に応じて現代社会の情報を触れながら国語の授業を行うことで、言葉の意味を知るだけではなく、物事の道理について考えを巡らせ、倫理的思考力を養うことを目的としています。

### 国語教育の土台は語彙力

しかし、考える授業を行うための土台づくりとして、語彙力の重要性も強く主

張しています。その背景には、小学校低学年で表れた国語教育の学力差が、そのまま後の学力差の拡大に影響しているという事実を認識したためだと説明しています。そこで、学習の質に大きく関わる語彙の学習量を小学生から増やし、語彙力を伸ばすための指導や、文や文章の構成を理解したり、複数の情報を関連付けて理解を深めたりできるようになるための指導を充実することも新たな方針として打ち出されています。

このように、国語教育は全ての学習や生活の基盤づくりを担う教科として、今までより一層重視されることとなりました。「高大接続改革」を中心とした論理的思考力の育成という目標に向か、各校がどのような国語教育を実践していくのかが、これからも注目されます。



#### 吉田先生の 見解・アドバイス

学習指導要領の改訂と、試験の改訂で明らかになったのは、大人になった後も生きる、実用的な読み解き力・記述力の重視です。今日、自分の感情や主張に基づき、文章や発言を歪めたり切り取ったりして理解することが問題視されています。そうではなく、正確に情報を読み取ること、そして、理解したことを自分の言葉で要約・再現できることが期待されています。日頃から、硬軟さまざまな文章に触れ、それを自分の言葉でまとめたり語り直したりする練習をしてみましょう。

(大学受験グノーブル:国語科担当)

## 5 大学が変わる

### 大学の“入口・中身・出口”的方針策定を義務付け

「高大接続改革」の一環として、全ての大学に対して「入学者受入れに関する方針」「教育課程編成・実施の方針」「卒業認定・学位授与の方針」の『3つの方針』を策定、公開することが17年4月から義務づけられました。

「入学者受入れの方針」は「アドミッション・ポリシー」とも呼ばれ、その名通り各大学の“入口”に関する具体的な姿勢の表明です。どのような学生に入学して欲しいと求めているのかを明示し、そのために入学者に求める学力や、具体的な入学者選抜方法を明確化します。

「教育課程編成・実施の方針」とは「カリキュラム・ポリシー」とも呼ばれる、大学の“中身”に関する表明です。どのような人材を育てたいと考えており、そのためどのように教育課程を編成・実施し、学習成果を評価するのかを具体的に示します。

「卒業認定・学位授与の方針」は「ディプロマ・ポリシー」と呼ばれる、大学の“出口”に関する表明です。大学を卒業するまでにどのような資質・能力を身につけてもらいたいのかを明文化し、卒業認定の基準として表明します。

これらはまさに、各大学の教育に対する姿勢や目標を表した、受験生にとって大変重要な情報であると言えます。しか

し、これまであまり注目されてこなかった背景には、既存の『3つの方針』が抽象的でわかりにくい、または形式的に決めただけで教育現場に反映されていない、といった現状があったためです。

### 『3つの方針』は大学にとっての差別化要素

大学には教育機関として、いつの時代も有能な人材を社会に送り出すことが期待されており、それに応えた大学が社会全体から認められ、巡って受験生からの支持を受けてきました。そして、その“有能”を測るための指標の一つが、これまで偏差値だったのです。

しかし、「高大接続改革」を中心に教育界全体で子どもの思考力や自主性を伸ばし、多様な個性・適性を引き出そうとしている今、数年後には偏差値以外の指標を示すことが社会や受験生にとっての大学側の地位表明として必要になってくることが考えられます。その一つが、『3つの方針』になり得るのです。

事実、ある地方の公立大学では少人数でのグローバル教育を実施し、その教育姿勢が多くの大企業から評価されるようになり、人気大学へと急成長しました。そのような教育方針による差別化競争が、「高大接続改革」によりさらに押し進められる可能性があるのです。

## News Hotline

# 見えてきた、大学入学共通テストの全貌

\*17年5月、新たなテスト名称(案)が発表されました。

## 1 プレテストを2017年11月に実施。

文部科学省は、センター試験に代わって導入される「大学入学共通テスト(仮称。以下「共通テスト」と表記)」の“事前プレテスト”を17年から3年間、実施することを発表しました。

「共通テスト」への改革の肝にあたる思考力や表現力を問う記述式のテストについて、作問・採点を含むテストの信頼性・妥当性についての実証的検証や、試験問題の難易度、運営上の問題の検証などを行うことが目的です。

17年は11月に実施予定で、対象者は原則高校2年生以上。対象教科は国語/数学/地歴・公民/理科/英語です。

「共通テスト」の実施に向けては、特に記述式の問題に対する採点の公平性や採点に要する時間、採点者の人員体制などについて議論が重ねられてきました。プレテストの成果次第では、20年度の本格実施に向けて記述式問題の質や量に対する方針変更が発表される可能性もあり、プレテスト後の動向にも注意が必要です。

### プレテストを機に、思考力養成型教育への変化が加速!?

また、プレテストの具体的な内容や成果・課題が公表されれば、それにともない教育現場での対応が急速に進むことが考えられます。

例えば、大学受験を見据えた進学校では、いち早く「共通テスト」に対応できる学生を教育するべく、授業スタイルやテスト内容の見直しを行われることが想定されます。また、進学塾や予備校においてもプレテストの内容を模した参考テキストを用意したり、模擬テストを実施するなど、「センター試験対策」に変わり「共通テスト対策」への準備体制を競い合うこともあります。

「高大接続改革」を筆頭とした教育改革をひかえ、教育界全体が手探りの中での変化を押し進める中、プレテストの実施・成果発表は、各所が一斉に改革に向けて歩みを進めるきっかけとなる可能性があり、社会的な注目度が一気に高まることになりそうです。

## 3 国語では80~120字の記述式問題が。

### 記述式は80~120字含む数問。100分程度の試験に

「共通テスト」で導入される予定の「記述式」問題。国語においては記述式のための大問を設け、80~120字程度で答える問題を含め3問程度を出題する方針であることが分かりました。また、試験時間は80分から100分程度に伸び、記述式問題の採点は民間業者に委託するとしています。

### 情報全体の要旨を読み解く力が問われる

“記述”的な内容について、文部科学省によると、これまでの大学入学者選抜などにおける国語の記述式問題は、「部分的な内容の理解」や「全文の要約」「共通点・相違点のまとめ」といった、文

章内容の基礎的な整理が設問の中心になっていました。これに対し、「文章の全体を精査・解釈して得られた情報を編集して解答する問題」は散見される程度であったとし、「共通テスト」ではこの点を抑えた記述式問題の導入を想定しています。

一方で、既存の知識・経験などから「自身の考えと統合・構造化して解答する問題」については各大学で「小論文」のようなスタイルを導入しているため、「共通テスト」での導入は推奨していません。

15年度末に発表された国語の記述式問題のたたき台では、文章に合わせてグラフを読み解く問題も例示されており、グラフや図表も含めた問題が出題される可能性もあります。単純な文章理解だけではない、情報全体の要旨を読み解く力を求められることになりそうです。

## 東大理Ⅲ・2018年度より面接試験を11年ぶりに実施。



東京大学は、理科Ⅲ類で18年度入

学の前期試験から、面接試験を導入することを発表しました。面接は試験3日目に当たる2月27日に、1人ずつ10分程度実施。入学志願票と調査書、志望動機を記した文書を基に、受験者の人間的成熟度や医学部への適性、コミュニケーション能力などを判断します。

### 面接で、医学に携わる意思を確認

東大では、99~07年度の入試で理Ⅲの面接を実施していました。当初は専門知識や医学に関する時事的事項、倫理観を問う質問が行われていましたが、少人数授業や担当教員の進路指導など、入学後に学生の適性を判断する環境が整ったという理由か

ら、07年度を最後に面接を廃止していました。

東大では面接を再開する理由として、「将来、医療や医学研究に従事するのにふさわしい資質を持つ学生を多面的、総合的に選抜するため」としています。一方で「現理Ⅲ生の医師の適性を否定するわけではないものの、成績は良いが医師の自覚に欠ける学生もいる」との苦言も呈しており、改めて医学を志す意思確認の必要性を説いています。

そのため再開される面接では、質問を事前に決めて受験生との会話に集中する自由面接を予定しており、加点することではなく、受験生に「本当に医師になりたいという思いがあるのか」を確認し、内省を促すとしています。

## Editor's Memo

Gno-info創刊号では、数年後に予定されている「高大接続改革」について5つのポイントに絞って改革の内容をお伝えしました。「高大接続改革」で「何が変わるのが」はもちろん重要ですが、それ以上に「なぜ変わるのか」。その点を読み解くと、まさにグノーブルの「知の力を活かせる人に」という理念に通じるものが多くあることが確認できました。これまででは「センター試験の廃止」や「記述式問題の導入」といった目に見えて分かりやすい変化ばかりがクローズアップされていましたが、改革の全体像を見渡すと、「高大接続改革」を中心とした教育界全体の方針転換であることが分かって頂けたかと思います。

